



奥日光・戦場ヶ原

日光は、那須火山帯に属する火山群から成り立っている。日光連峰は、男体山を中心に東西に伸びている。一方、北関東以北では我が国最高峰の白根山(2578)塊は、南北に伸びている。中禅寺湖をはじめ大小の湖沼は、火山活動による堰止湖である。戦場ヶ原、竜頭ノ滝、華厳ノ滝も、男体山の噴火によって出現しています。火山によって造られた日光の自然、いつもと趣意ではないようです。



中禪寺湖と湖沼

の火山があることから変化に富む地形を造っています。男体山の噴火によって堰止められた中禅寺湖は、標高1269（日本最高）・面積11.8K・水深163（上野島の北東部、深度日本第7位）、集水面積は134Kと湖面積の約11倍以上と大きな面積を持つことから、湖水の平均滞留時間は4.8年と短い。

淵ノ湖、刈込湖、切込湖、蓼ノ湖、
酒沼は、戦場ヶ原の北にある三岳の
噴火による堰止め湖である。西ノ湖
は中禅寺湖から切り離された遺留湖
である。水深 163 の中禅寺湖、この
深さは草薙ノ滝の滝壺より約 50 低
い。これは、大谷川が現在より北に
側を回って流れていたことを、示すも
のとなります。また理科年表では全面
結氷しない湖とされていますが、近年
では、昭和 21 年 (1946)、昭和 59 年
で、(1984)に全面結氷が確認されていま
す。戦前の御料林の管理者によると、

昭和20年12月の半月間に60を越える積雪が3度あり2月に結氷し、中俣村から葛蒲まで氷上を歩いていったという。昭和59年も関東の平野部が大雪に見舞われた年である。東京まで冬の間、家の北側で雪が氷となり残っていた。深度もあることから全面の湖水が冷えて結氷するのではなく、大雪が続き、湖面に積雪が氷面となっていく過程で結氷が行なわれたと思われる。

湿原・戦場ヶ原 湿原の中の道は、多くが二本の木道でできている。夏休みに入ると児童・生徒の移動教室で木道が歩きにくい程の混雑をみせる。ほとんどが平坦な所で、木道が縦横に整備されている。分岐点が多いので地図がないと迷路に迷いこんだ状態になることも。湿原は、踏まれると復元にくいので木道から外れることがないように。更に、野性の動物たちも多く顔を見せる。エサなどを与

えることのないように注意したい。

戦場ヶ原は、約 400 の面積を持つ
湿原である。訓路湿原や尾瀬ヶ原も
同様な湿原だ。寒冷な氣候のため腐
敗する植物の量より、腐敗しないで残
る植物が次第に重なり、それが泥炭
化し湿原になっていったものである。
湿原は、水分が多い上に泥炭の影響
で酸性度が高く、植物の育成には適
さない。厳しい環境の中で育まれて
いるのが湿原の植物だ。

戦場ヶ原の花



憐な花が楽しめる。近年、シ
 力のためにアヤメやアザミ、
 ハクサンフクロウ
 が激減。群生して
 見られる物は樹木
 の花が主とな
 り、ズミ、レ
 ンゲツツシ、
 ホザキシモツケ

などである。

タチツボスミレ	5月～6月中
ズミ	6月上～中
ワタスゲ	6月中～下
レンゲツツジ	6月下～7月上
アヤメ	6月下～7月上
ハクサンフウロ	7月上～8月上
ハナショウブ	7月中～下
バイケイソウ	7月中～下
ノアザミ	7月下～8下
ワレモコウ	8月上～下
アキノキリンソウ	8月中～9月中
エソリンドウ	8月下～9月上
リンドウ	9月中～10月上
ノコンギク	9月中～10月上
紅葉	10月中～下

繁殖続ける帰化植物

原を始め、中禅寺湖や湯元で大群落を作る黄色いコスモスのような花が、オオハンゴンソウ(大反魂草)である。園芸種であるから花も大きく、8月から10月上旬に咲く帰化植物。明治中

期に園芸用に輸入された、北アメリカ原産のキク科の植物である。性質が強く、広く栽培されたため野性化している。主に関東以北の空き地や河原に群落を作る。キクイモに似てるが、花の中央部が半球状に盛り上がっているのが区別できる。花びらが、下に垂れ下がっているのも特徴である。在来の植物相に影響が出てきていることから、ボランティア団体が1本1本手で抜き取って駆除する光景が、毎年放送メディアで紹介される。

笹の種類で積雪量 奥日光
には、4種の笹が分布する。雪の深い
金精峠や湯元はチマザサ(葉が
大きく竹の旨い)。その次に積雪
のある白根山から西、西ノ湖あたりは
チマキザサ(葉の両面に毛がない。食物
を包むのに使用)。これらの笹は、
冬は雪に埋もれて外気に触れず寒風や
低温に会うことがない。一方、戦場ヶ
原周辺ではミヤコザサが繁殖。スズ

タケ(丈高く、葉が細い。積雪量75以下の所)も雪の少ない高山周辺の地域に分布している。

奥日光の魚 明治以前には、中禅寺湖には魚類が見られなかったようだ。草飯坂が魚類の遡上を阻止していた。また信仰の聖地として、魚類の放流などが禁じられていたためである。明治6年(1873)、神社の宮司、柿沼広集が魚類の放流を認め、日光細尾の住民、星野定五郎がイワナ2200匹をいろは坂下より運び、中禅寺湖に放流した。その後、コイ・フナ・ワカサギなどが放流され、サケ科他5科19種の魚が棲息する。

昆虫の宝庫 学名に Nikko 名がつく昆虫は、44 種にも及ぶ。諸外国の研究者や採集家が多く訪れた。観光開発が進む 1960 年代に、多くの昆虫が被害を受けたのは確実であるが、現在もチョウ、カミキリ虫を始め、



貴重な昆虫が棲息する。飛び方、雄大さから北国の帝王と呼ばれるのがオオイチモンジ。本州では亜高山帯に分布。ドロノキを食し、7月半ばから下旬のわずかの期間しか見られない。一般的によく観察できるのが、スミレ類を食するヒョウモン蝶、マメ科を食すヒメシジミ、ホガキシモツケを食べるフタスジチョウなどが夏期に観察できる。

哺乳動物 特別天然記念物のニホンヤマネ、ニホンカモシカ、天然記念物のニホンヤマネを始め、ツキノワグマやニホンシカなど哺乳類は7目13科27種が奥日光で確認されています。近年絶滅したものでは、豚コレラでイノシシが全

減っています。男体山の斜面では、多くの木が枯れ始めました。足尾の方に多かったカモシカも、10年ぐらいうちに突然姿を消しました。どちらもシカと関係があるようです。調査すると、シカの棲息密度は、1K 当たり40頭を数える程になりました。これはものすごい数です。その場所の林の中の下草は、ほとんど食べつくしていました。シカが好む植物で、日光周辺ではでは、クガイソウという植物が一番先に姿を消しました。これは、コヒョウモンドキという蝶の食草だったため、この蝶は絶えてしまいました。なぜシカが増えてしまったのでしょうか。天敵のオオカミが絶滅し、カラマツの植林が行なわれた所の下草がササ原になります。シカにとって大好物であり、足尾銅山の緑化に牧草が使われたこと、積雪が少なくなったことも要因です。温暖化が環境の変化を促しています。

考えてみよう 戦場ヶ原が湿原であり続いているのは、バラ科のズミが川から流れこむ砂礫を林で受け止めているからだ。逆川が国道120号をくぐり戦場ヶ原に到達する当たりを観察。1本の根から20～30本を越える幹を持つズミがある。幹と幹の間には、泥や流木がびっしりだ。大水のたびに襲う砂礫でズミの幹が折れ、そこから新しい芽が芽生えた。周囲には20を越える幹が軋がっている。木道を歩き、ズミが減っていくのに合わせ砂礫も小さくなり、逆にシラカンバやイヌコリヤナギが大半を占めるようになる。礫はもう数程度の大きさとなる。湿原を守るには、ズミ群落の保護が必要だ。平成6年には「ズミ論争」が展開し、三本松展望台のズミ400本が切り倒された。展望を妨げ、湿原の水分を蒸散させてしまうからだという。湿原を現状で残すのが自然保護か、それとも自然のままに任せるか考え方は難しい。